

童話 何故さう物語

——ラッドヤド・キプリング——

東京女子高等師範學校教授 中野好夫 譯

一。何故象のお鼻は長くなりましたか。

昔、昔、ずーと昔、象さんのお鼻は決してあんなに長くはありませんでした。ほんの真黒い、ブリツミふくれた、それは丁度長靴くらいの大きさのお鼻が、あの大きな體軀からだにボツンミついてゐるだけで、象さんはそのお鼻を左右にモグくゝ動かすこゝぐらゐは出来ましたが、お鼻で地面の物を拾ひ上げたり、そんなこゝは勿論出来ませんでした。こゝろがある時、象さんに子供が一匹生れました。こゝろがこの子象君は大變な知りたがり屋の聞きたがり屋で、もうなんでもかでも根掘り葉掘り聞かなければ承知が出来ませんでした。子象君はアフリカに住んでましたが、アフリカ中の仲間達をみんな例の根掘り葉掘りの質問ですつかり困らせてしまひました。

子象君は背高の叔母さんの駝鳥さんのこゝろへ参りました。『叔母さん、叔母さん、あのう、叔母さんの尻尾の羽根は、何故そんなにチンチクリンになつたんです。駝鳥の叔母さんは硬いゝ距けづめで子象君をコツンミ蹴つ飛ばしました。』

子象君はノッポの叔父さんのキリンさんのこゝろへ参りました。『叔父さん、叔父さん、あのう、叔父さんの皮は何故そんなにボツボツがあるんです。ノッポの叔父さんは硬い蹄ひづめで子象君をボーンミ蹴つ飛ばしました。』

それでも、まだ子象君はいろんなこゝろが知りたくて知りたくて、たまりませんでした。

今度は肥よつちよの叔母さんの河馬さんのこゝろへ参りました。『叔母さん、叔母さん、あのう、叔母さんの眼は何故

そんなに真赤いのです。河馬の叔母さんは平つたい大きな蹄で子象君をビシャーンミ蹴つ飛ばしました。

そこで今度は毛むくぢやの叔父さんの狒々猿さんのところへ参りました。『叔父さん、叔父さん、あのう、メロンてば何故あんなに美味しいんです。毛むくぢやの叔父さんの狒々猿さんは、毛むくぢや前足で子象君をボーイミはね飛ばしました。』

それでも、まだ子象君はいろんなこごが知りたくて知りたくて、たまりませんでした。

見るもの、聞くもの、嗅いだもの、觸つたもの、なんでもかでも一應は聞いてみなければ、子象君は承知が出来ませんでした。そしてその度に叔父さんや叔母さん達は子象君をボンく、ボンく蹴つ飛ばしました。それでも、まだ子象君はいろんなこごが知りたくて知りたくて、たまりませんでした。

ある大變お天氣のよい朝でした。子象君は、それはそれは素敵な質問を考へつきました。『あのチエ、あのチエ、鰐さんてば御馳走に何を食べるんだらうチ。するさみんなが

一度に、『うるさいッ!!!』ミ怒鳴つたかと思ふミ、みるまに寄つて集つて可哀相に子象君を蹴飛ばすやら、はね飛ばすやら、散々な目にあはせてしまひました。

子象君は仕方がないので、泣くく、藪の中のお家に住んでゐるコロく鳥さんのところへ参りました。『僕んちのチ、父さんもチ、母さんもチ、伯父さんもチ、伯母さんもチ。僕がいろんなこごを聞きたがるつて、みんな僕を蹴飛ばしちまうんだよ。だけぎ僕、やつぱり知りたいんだ、鰐さんが御馳走に何を食るかつてこごをチ。』

するミコロく鳥さんは、大變氣の毒さうに申しました。『それはチ、坊ちゃん、あの向ふの大きな河へ行つて御覽なさい。あの一杯ユーカーリの樹の繁つてゐる河岸に行つて御覽なさい。そうすれば、坊ちゃん、きつミわかりますよ。』

早速翌る朝、知りたがり屋の子象君は、バナナを百斤ミ、甘蔗を百斤ミ、それからメロンを十七ミ、それだけをちやんご用意して、さてお家の人達に申しました。『さよなら！僕チ、あの一杯ユーカーリの生えてゐる河岸へ行つて來ま

すよ。あのう、僕、鰐さんが何を御馳走に食べるんだか、見て來ますからぞ。』するごまたしても、みんな寄つて集つて、子象君が、ごうか勘辨して下さい、ごうか勘辨して下さい、一生懸命にお願いするのも聞かないで、散々に蹴つ飛ばしてしまいました。

そこで子象君はいよくお家を出懸けました。途々メロンを食べく、そしてメロンの外皮かわをそこら中にベッベツミ吐き散らしながら、歩いてゆきました。だつて子象君には外皮かわを拾ひ上げるごきが出来ないのですもの。

子象君は東へくく、ドンくくくく歩きました。それから今度は、また北へくく、ドンくくくく歩きました。其間も始しよつう終メロンをムシヤくムシヤく頬張りながら。で到頭子象君は、あのコロく、鳥が言つた通りに、一杯ユーカーリの樹の繁つた大きな河のそばへやつて参りました。

そこで、皆さん、いゝですか。——この知りたがり屋の子象君こいふのは、實は、オギヤアだか、オブウだか——一聲生れて以來今日まで鰐さんを一度だつて見たごきが

ないのです。で勿論鰐さんがどんなものだか、少しも知らないのです。たゞなんでも知りたいごいふ、たゞそれだけなのです。

そこで子象君が最初に出會つたのは、大きな真黒い、それは見るも怖ろしい大蛇でした。大きな巖のまはりに黒々ごじろつごじろを巻いて居ります。

『あのう、モシ、モシ』子象さんは出来るだけ丁寧に申しました。『濟みませんが、この近所に鰐さんこいふを仰言る方を御覽になつたごきは御座いませんか。』

『ナニッ!! わしが鰐さんを見た……!』大きい黒い大蛇はおそろしい見幕で申しました。『ウム、それがごうした。』

『あのう、すみませんが、鰐さんこいふを仰言る方は、あのう、何を御馳走に召上つてゐらつしやるか、それを御伺ひしたいのですが……。』

するご真黒い大蛇はたちまちグルグルごじろを解いて、あの鱗だらけのザラくした尻尾で、子象君をビシヤリごじろはね飛ばしました。

『こいつは變だぞ。』子象君は考へました。『たしかに變

だ。父さんも、母さんも、それに叔父さんも、叔母さんも、

——それや、も一人の河馬叔母さんや、も一人の狒々猿叔父さんならあたりまへだけぎ、——みんな、僕がいろんなこゝを聞きたがるつては、僕を蹴飛ばしたつけ。——してみるさ、何處へ行つても、同じこゝなのかなア」。

そこで子象君は、眞黒い大蛇に、出来るだけ丁寧によならを言つて、それから元通りに大蛇の體軀からだを巖のまはりに巻きつけてやつて、さて子象君はまたノコノコ出懸けました。途々メロンをムシヤクノ頬張りながら、外皮かわをベッベッそこら中に吐き散らしながら、出懸けて参りました。だつて子象君は外皮かわを拾ひ上げるこゝが出来ないのですもの。やがて子象さんは、ユーカーリの樹の繁つた河岸の、丁度水際にやつて來ました時、突然大きな材木のやうなものをいやさいふ程踏みつけました。

だが、皆さん、それが鰐さんですよ。驚いたやうに鰐さんは、片つ方の眼玉をバチクリさせましたホラ、こんな工合に手。

『あのう、すみませんが、さかかこの近所で、鰐さんを御

覽になりませんでしたでせうか。』子象君は、出来るだけ丁寧にたづねました。

するさ鰐さんは、もう片つ方の眼玉をバチクリさせて、尻尾をツーツミ少しばかり泥の中から擧げました。子象君は、これはまた蹴つ飛ばされやしないかと思つて、おそろくソーツミ後退りしました。

『オヤ、小僧さん、こゝへお出で。』鰐さんは申しました。『お前は何故そんなこゝを聞くのだね』。

『御免さい、御免なさい』、子象君は出来るだけ丁寧に申しました。『あのう、父さんも僕を蹴つ飛ばしました。母さんも蹴つ飛ばしました。それから背高の駝鳥叔母さんも、ノッポのキリン叔父さんも、エ、それやひびく僕を蹴つ飛ばすんです。それから肥つちよの河馬叔母さんも、毛むくぢやの狒々猿叔父さんも、あの鱗だらけのザラノくした尻尾を持つてくる大蛇の小父さんも、——え、あの小父さんは一等ひびく蹴つ飛ばしましたよ。チエ、小父さんもやつぱり僕を蹴つ飛ばすんですよ。ぢあ、僕もう蹴つ飛ばされるのはいやだ』。

『小僧さん、小僧さん、こゝへお出で、わしが、お前、その鰐さんなんだよ。』鰐さんはそう言つて、偽ぢやアないといふ代りに、「鰐の眼に涙」を一杯浮べて申しました。

で子象君は、もう胸一杯にこみ上げて来て、河岸へベタベタミ座つてしまひました。まあ、小父さんですか。僕が此向から、こんなに探してた鰐さんは、そうですか。——ぢや、小父さん、ネ、言つて下さい、小父さんは御馳走に何を食べるんです。』

『小僧さん、小僧さん、一寸こゝへお出で。』鰐さんは申しました。『ゾーッ、小さい聲で言つてあげるから。』

で子象君は顔を、鰐さんの口のすぐ側へ持つてゆきました。するゝ鰐さんは、突然子象君の小つちやなお鼻を——みなさん、この時までは子象さんのお鼻は、ホラ、長靴くらゐの小つちやいお鼻だつたんでせう——その子象君のお鼻にガブッミ一つ食ひつきました。

『ヨシ、今日は一つ、象の子供から御馳走にならうかな。』鰐さんは——ホラ、こんな風に子象君のお鼻をくはえたまふ、口の中で申しました。

サア、びつくりしましたネ、子象君は。そして鼻聲で申しました。「放して下さい、放して下さい。小父さん、駄目ですよ。』

丁度そこへ、さつきの大蛇が、ゾロゾロ河岸を降りて来て、「ヤイ、小僧、早く引張るんだ。早く引張るんだ。でない、ホーラ、あの向ふの水の中に、見るまに引摺りこまれてしまふぞ。』

子象君はそこで可愛い尻餅をベタンミついて、カ一杯、エンヤラサ、エンヤラサミ、引張りました、引張りました、引張りましたネエ。するゝ、子象君のお鼻がだんぐだんぐ伸びてきました。鰐さんは、大きな尻尾をひきくバタ／＼させて、あたりの水をはねっかへしながら、だんぐ／＼水の中に退つてゆきます。そしていよく強く引張りました、ウントコドッコイ、ウントコドッコイ。

子象君のお鼻は益々伸びてきます。子象さんは可愛らしい四つの足を力一杯踏ん張つて、エンヤラサ、エンヤラサ、引張りましたネ。お鼻はまだぐ／＼／＼伸びてきます。鰐さんは鰐さんで、尻尾をボートのオールのように動かして

て、これもウントコ、ドッコイ、ウントコ、ドッコイ、引張りましたネ。そして力を入れるたびにお鼻はみるみる伸びてきました。

子象君はさうかするミ力を入れた足が滑りそうな気がしました。もうたまらなくなつて、鼻聲で——お鼻さいへば、もうさつきから、かれこれ五尺位に伸びてしまひました。——『ひぎいや、ひぎいや、あんまりひぎいや』。ミ泣き出してしまひました。

するさつきの眞黒な大蛇がスル／＼降りて来て、子象君の後足にキリ／＼ミまはりほごからみつきました。そして、『ヤイ、ヤイ、粗忽し屋の小僧、サア二人で一踏ん張り踏ん張るんだぞ。でないミ彼奴のために一生不具者になるかも知れねえぞ』。

サア、そこで眞黒い大蛇もエンヤラサ、子象君もエンヤラサ、鰐さんもエンヤラサ、みんなで懸命に引張りました。でも到頭子象君ミ大蛇ミが引張り勝つて、バチン!!ミそれはそれは四邊一面に響き渡るやうな大きな音がしたミ思ふミ、流石の鰐さんも到頭子象君のお鼻を放しました。

ミたんに子象君は見事トンボ返りを打つて轉がりましたが、でも何より先に大蛇に有難うミ御禮を言つて、それから可哀さうにすつかり伸びてしまつたお鼻の介抱にさりかかりました。冷めたい大きなバナナの葉つばにお鼻をすつかりくるんで、河の水の中にソーツミ浸して冷やしました。『そんなこゝをして、何になるのだ』大蛇が申しました。

『御免なさい』子象君は申しました。『でも僕の鼻こんなになつちやつたんです、僕、鼻のちぢむのを待つてゐるんですよ』。

『そんなこゝをしちや、日が暮れるわい』。大蛇は申しました。『わからん奴が居るもんだ』。

子象君は三日の間そこでお鼻のちぢむのを待つて居りました。だがお鼻は短くなるどころか、おまけに子象君の眼玉はだん／＼簸睨みになつて參りました。だつて、みなさん、鰐さんに引張られたゝめに、子象君のお鼻は、今みなさんの御覽になる、あの象の長いお鼻そつくりになつてしまつたのですもの。

丁度三日目の、それももう日も暮れかゝる頃でした。ふ

「一匹の蟲がブーンと飛んで来るぞ、子象君の肩をチクリと刺しました。子象君はハッと思ふたんに、長くなつたお鼻の先をヒョイミ上げるぞ、ピシャッとその蟲をたゞき殺してしまいました。」

『巧いぞッ!!』大蛇が申しました。『成程、チンチクリンの鼻ぢや、こいつは出来ないや。今度は一つ何か食べて御覽よ。』

子象君は別に何んぞいふ考へもなしに、お鼻をヒョイミ伸ばして、一株の草を根つこから、ポリ／＼と引つこ抜きました。そして前足でバタ／＼と土を落すぞ、そのまゝお鼻の先で口の中へムシャムシャと押しこみました。

『巧いぞッ!!』またしても大蛇は申しました。『成程、チンチクリンの鼻ぢや、こいつは出来ないや。小僧さん、此處はお太陽様てんやうが暑かないかね。』

『エ、暑いですネ。』子象君はそう申しますぞ、ついで何の氣もなしに、河岸の泥をお鼻の先ですくひ上げて、自分の頭の上にこすりつけました。こみるまに耳の後ろまで、それは氣持のよい、冷めたい日除帽子が見事に出来上りま

した。

『巧いぞッ!!』またしても大蛇は申しました。『成程、チンチクリンの鼻ぢや、こいつは出来ないや。こころでござうだい、も一度誰れかに蹴飛ばしてもらつちやあ。』

『御免なさい、御免なさい。子象君は申しました。『僕もうあれだけは眞平ですよ。』

『ぢや、今度は一つ他人を蹴つ飛ばす方はござうだい。』大蛇は申しました。

『エ、僕、是非一つやつてみたいなあー。』

子象君は申しました。

『うん、大蛇は申しました。『お前さんのその新しい鼻だかね、こいつは他人を蹴飛ばすには、全くいゝようだな。』

『小父さん、有難う。』子象君は申しました。『僕、きつこ忘れぬいや。小父さん、僕ネ、家へ歸つたらきつこやつてみますよ。』

そこで小象君は、お鼻をブラ／＼させながら大急ぎで歸つて参りました。果物が食べたくなるぞ、もう今迄のやうに枝から落ちるのを待つて居なくとも、いくらでも木から

お鼻でもぎこりしました。草が欲しくなるを、今迄のやうに

一々お座りしなくても、ドンドン地面からむしりきつて食べました。蟲が刺せば、大きな木の枝をへし折つて、まるで蠅たゝきのやうに振り廻しました。陽がカンカンあつてくれば、早速例のつめたい泥の日除帽子をこさへました。また歩きながら淋しくなるを、長いお鼻でひきり鼻歌を歌つてゐました。長いお鼻は樂隊よりも大きな音をたてました。それから子象君はわざ／＼廻り路をして、肥つちよの河馬さんを訪問しました。そして大蛇の言つたこゝが眞實かどうか、思ひきりうん／＼一つ河馬さんをはねきばしてやりました。そして用事のない時は往き路に吐き散らしていつたメロンの外反を一つ一つお鼻の先で拾つて歩きました。――だつて子象君は大變綺麗好きだつたのです。

である暗い晩、子象君は到頭なつかしいお家へ歸つて参りました。そこで、まつお鼻をキリキリ巻いて、『今日は』と申しました。みんなそれはそれは大喜びに、喜んでくれましたが、もうすぐその後から、『サア、お出で、お出で、小さい聞きたがり屋さん、一つ僕等で蹴飛ばしてあげるか

ら』と申しました。

『ブッ!!!』子象君は吹き出しました。『蹴飛ばすなんて、君達に何がわかるもんかい。僕は知つてるんだ。一つ今見せてやるよ。』

と言つたと思ふに、子象君は長いお鼻をスルスルッと伸ばして、二人の兄さん達をまた／＼くまにコロコロッと引き返してしまひました。

『ウワァー、お前は何處でそんな藝當を習つて來たんだ!! 一體その鼻はさうしたんだ!!』

『僕はネ、僕はネ、あの向ふの大きな河の岸に住んでる鱧の小父さんから、この鼻をもらつたんだい』。子象君は申しました。『僕ネ、小父さん、御馳走に何を食べるんだいつて聞いたたら、小父さんがネ、これを持つてつけてくれたんだよ。』

『随分みつきもない鼻だなあ』。と毛むくぢやの狒々猿叔父さんが申しました。

『そりやそうさ』。と子象君は申しました。『だけき便利だよ。ホラ!!』と言つたかと思ふを、毛むくぢやの狒々猿叔父

さんの毛むくぢやの片つ方の足を、ヒョイヒョイ引掛けて、大熊蜂の巢の方へゴムまりのやうに投げ上げました。

それから子象君は背高の駝鳥叔母さんの尻尾の羽根を引つこ抜くやら、ノッポのキリン叔父さんの後足をつかまへて、籤中を引摺りまはずやら、肥つちよの河馬叔母さんに怒鳴りちらして、叔母さんが水の中で、食後のお晝寝をして居るところを、耳の中に水を吹きこむやら、それはそれは悪戯つ子の子象君は、まるで家中を相手に、大暴れに暴れ出しました。で到頭みんなもびつくりするやら、あきれるやら、すつかりカンカンに怒つてしまひました。でも子象君は、コロコロ鳥にだけは少しも亂暴をしませんでした。

すつかり大騒動になつてしまつて、家中のものは思ひ思ひに大急ぎで、あのユーカーリの樹の繁つてゐる大きな河の岸へこ、ゾロゾロ、ゾロゾロ出懸けて参りました、みんな鱈さんから、新しいお鼻を借りようといふつもりなんです。やがてみんなが歸つて参りました時には、もうお互に蹴飛ばしあつたりするものは一人もありませんでした。みなさん、その時以來、みなさんの御覽になる象はみんな、

あの聞きたがり屋の子象君のお鼻こそつくりな長い長いお鼻を持つやうになりましたトサ。

(五九頁のつゞき)

米糠は直ちには吸収されませんので是は堆肥又は腐葉土等を作る場合にその間に混じておく方がよいのであります。米のこぎ汁は灌水の代りに時々やるやうに致します。

次に草木灰も保存の時は雨水のかゝらない所におき使用の折は土に混じて用ひたり植付けしてある間に施す場合には畦の間を淺く掘りこの中に草木灰を撒き又上に覆土しておくのであります。

この外藥劑の撒布もしなければなりませんけれども是は次回に述べる事と致します。

尚この期を逸する事の出来ないのは春播の草花を下種する事ではありますが名稱等に就ては既に申し述べてありますのでこの度又重ねる要もないと思ひますから省略致します。